富たる者と貧しき者

堺利彦

一 富みたる者の智慧

隨分古い昔から此の世の中に富みたる者と貧しき者とがある。所が、貧しき者が兎かく不平を起す。そこで富みたる者が智慧を出して、何とかして其の不平を紛らかそうとする。

二 胃の腑と手足との關係

先づ第一に斯ういふ話をして聞かせた。人間の體には分業がある。手足は毎日働いて食物を拵へる。胃の腑は其の食物を呑んで消化させる。然るに或時、手足が不平を起した。俺達は働いてばかりゐる。胃の腑は遊んでばかりゐる。そして旨い物ばかり食つてゐる。俺達は馬鹿々々しいと云つて、手足が働く事をやめたとすると胃の腑は食物を斷たれて大いに困つた。けれどもそれと同時に、血液が手足に廻らなくなつたから、手足も矢張り痩せて來た。だから、手足は、不平なんぞ起さずに、默つて働かなくてはいけない。富たる者と貧しき者との關係も其通りである。

そう云はれて見ると、貧しき者は、成程そんなものかなアと、暫く默つて働いてゐた。

三 腦と手足との關係

富みたる智慧者は更に斯ういふ話をして聞かせた。人間の體には中心がある。其の中心は即ち頭である。頭の中には腦髓がある。腦髓は貴い者、大切な者である。其の大切な貴い腦髓が指揮命令をするから、それで人間の體は活動が出來る。手足など云ふ者は、只だ腦髓の指揮命令に從つて、おとなしく働いて居ればよい。手足が不平を起したりするのは、分を知らんといふものだ。社會の事も其の通りである。

そう云はれて見ると、貧しき者は又、成程そんなものかなアと、暫くはおとなしく働いてゐた。

然し又段々に貧しき者の不平が起つて來た。成程、分業は必要だ。中心も必要だ。然し富みたる者ばかりが、ナゼいつでも胃の腑の役と腦髓の役とを務めるのか。貧しき者ばかりが、ナゼいつでも手足の役を務めるのか。貧しき者の體にもチャント胃の腑があり、腦髓がある。そして富みたる者の體にもチャント手足がついてゐる。ナゼ貧しき者の胃の腑には食物がはいらないのか。ナゼ貧しき者の腦髓は指揮命令をする事が出來ないのか。そしてナゼ富みたる者の手足は働かないのか。人間の社會を人間の體に喩へたのが間違だ。體の分業と社會の分業とは、分業の性質が違ふ。

四 蜜蜂と蟻の話

富みたる智慧者は此の不平を聞いて大いに驚いた。そこで又一層奥の手の智慧を絞りだして、斯ういふ話をして聞かせた。

蜜蜂の社會は共同生活の模範である。そこには只つた一疋の大きな女王がゐる。それから何十何百かの雄がゐる。そしてあとの何疋かは總て働き蜂である。斯ういふキチンとした分業制度になつてゐるから、蜜蜂の社會は非常に繁昌する。働き蜂は決して不平なんぞ云はない。毎日々々セッセと働いて、蜜を取つて來ては女王と雄とを養つてゐる。

蟻の社會でもそうだ。或種の蟻には、體の大きい奴が少しと、體の小さい奴が大勢ゐる。小さい奴は兵卒で、大きい奴は將校だ。將校と兵卒との區別がキチンとして、どうしても其の區別を動かす事が出來ない。斯ういふ分業制度になつてゐるから、蟻の社會は非常に繁昌する。蟻の兵卒は不平なんぞ決して云はない。人間の社會もそんな風にしなくては駄目だ。

そう云はれて見ると、貧しき者は例の通り、成程そんなものかなアと感心して、又默つておとなしく働いてゐた。

然し又段々不平が起つて來た。蜂と蟻の話はどうも少しおかしい。人間は蜂や蟻と違つて、銘々の體の出來方が皆な同じである。男女の別だけは勿論あるが、其外に生理上の違ひはない。我々は働き蜂や兵卒蟻にばかりなりたくない。人間の社會を蜂や蟻の社會に喩へたのが間違だ。昆蟲の分業と人間の分業とは違ふ。

五 賢愚の別と勸業債券

サア又智慧者が驚いた。そこで

今度はこんな事を云ひだした。如何にも人間は皆な平等だ。然し賢愚の別といふ者がある。賢い者は金持になり、愚かな者は貧乏する。之はどうしても止むを得ない。現に足輕から總理大臣になつた人もある。一文なしから千萬長者になつた人もある。賢愚の別は爭はれない。悔しいと思ふなら賢くなれ。諸君は誰でも皆な千萬長者にも總理大臣にもなれる。之ほど公平な事はない。

そう云はれて見ると、成アるほど其通りだ。俺も一つ奮發しようと云ふので、少し元氣のいゝ連中は、總理大臣の夢と千萬長者の夢とで暫く現在の不平を忘れる。又意久地のない連中は、成アるほど俺達は愚かなのだ。どうも仕方がない。貧乏は俺達の天命なのだと諦らめてしまふ。智慧者は胸を撫でおろしてゐる。

然し、いつまでも夢を見てる奴ばかりはゐない。又俺だつて萬ざら馬鹿ではないと考へる奴も出て來る。勸業債券を一枚か二枚買つてゐたつて、それで二千圓取れるとは極つてゐない。當り籤は三人か五人と初から極つてる。百人の中で九十九人は馬鹿を見るに極つてる。之はイッソの事、勸業債券といふ者を廢止する方がいゝ。社會の富籤制度を全廢するに限る。こんな怪しからん事を考へる奴が現はれて來た。

六 デモクラシーの說法

サア又智慧者が心配しだした。然しキャッ等もサル者、更に又一つ斯ういふ旨い事を思ひついた。

富みたる者はモウ決して我儘をしない。今後は何でも多數の人の云ふ通りになる。國民の代表者が帝國議會に集まつて、其の多數決で極めた事なら、何でも其の通りにする。不平があるなら議會で云つてくれ。そして議會の多數を制してくれ。そうすれば社會は諸君の思ふ通りになる。それが即ちデモクラシーだ。デモクラシーが行はれる以上、諸君が不平を云ふのは間違つてゐる。

此の旨い說法で、又ナアルホドと感心する人の好い連中もある。

然し考へて見るがいゝ。我々が皆んな選舉權を持つた所で、只それだけで實際何が出來る。國民の多數は朝から晚までアクセクと働いて、政治の事なんど考へる暇がない。選舉權があつても中々それを使はない。使ふにしても金のある奴に利用される。又少しくらゐ智識のある人民でも、學校や、教會や、お寺や、新聞紙で、碌でもない事を教へこまれてゐる。從つて×××××××、×××××××××××××××××。×××××××××××××。折角のデモクラシーが實際は中流以上に限られたデモクラシーになる。

そこでデモクラシーも、決して世間で云ふような、そんな立派な公平な、貧しき者の爲になる制度とばかり限らない事になる。

勿論、議會も利用の出來る場合は利用するがいゝ、金持の政黨や、御用學者や、御都合主義の政治家などに欺されないだけの、徹底した見識が立つた以上、隨分利用の出來る場合もある。

それで兎にかく、我々貧しき者は我々の組織に依つて勢力を作りそれに依つて我々の理想を社會の全般に實現させねばならぬ。其後に於いて我々は初めて、富みたる者もなく、貧しき者もなく、壓制もなく、屈從もない、自由の社會に入る事が出來るのである。

英國皇太子殿下に

『貧しき者は奪はるゝが故に貧しくなり、貧しきが故に又奪はる』と一言のもとに總括せられるのであります。

私の申上たいと思ふ根本的の要點は制度が惡いと申す事であります。つまり金儲萬能の制度、一方には極めて少數の人達が富み肥へて繁華を極めた生活をなして居りますのに、一方には大多數の人達が、たゞ辛うじて其日々々を送るやうな慘な生活の爲に苦鬪してゐると云ふ今日の制度が惡いと申上たいのであります。此制度の爲にすべてが惡くなつて行くのであります。そしてこの事實が世のすべての人から認められて此の世界から一掃される日が來る迄は世界に平和も滿足も來ないのであります。

全世界は今や破產の淵に臨んで居ります。謂ふ所の文明は破れた籃の葉の樣に果敢ないものであることを證しました。何故ならば今日までの文明は眞に萬人の爲の文明でなかつたからであります。

私共は新しい社會制度を欲しております。社會制度は私共が欲する品物を生產し分配せんが爲に勞働を組織する所のものでなければなりません。即ちそれは總てのものが力を一にして精力を盡し、淸く正しい目的と善意とによつて今日の樣に慘な、資本主義の爲めに乞食の樣な生活に陷つてゐる私共を、萬人の利益、萬人の幸福の爲めに、國民の總てが力を一にして働く共力和合の國に住まはせる樣にすることより他にありません。

斯くの如くに產業が組織さるゝ時、私共は最早働かんが爲に生きて居るのではなくて、生きる爲に働くことになるのでありませう…。

本年春、勞働問題、失業問題の爲に英國皇太子が活動せられたる時、社會黨機關紙デーリー、ヘラルドの主筆ランスベリーが皇太子に對して發表した公開狀の一部である。(時事新報より)